

小さな妹をつれて

小川未明

青空文庫

一

きようは、二郎ちゃんのお免状日めんじょうびです。お母さんかあは、新しい洋服ようふくを出だして、「これきを着きていらつしやい。よござのでありませんよ。」と、おつしやいました。二郎ちゃんじろうの、いままで着きていた洋服ようふくはよごれて、ところどころつくろつてあります。

「お母さんかあ、これでいいよ。」と、二郎ちゃんじろうは、いいました。こないだまで、こんな服ふくは、みつともないといったくせに、きようは、新しい服あたらふくを着きていくとはいわぬのです。

「どうしてですか。」

「いいよ、これで。」

「三年生ねんせいになつたのですから、新しいのあたらを着きていらつしやい。」

「だつて、お母さんかあ、非常時ひじょうじでしょう。」

「まあ、それでそういうの。」

「なんでも、きようは、これでいいのだよ。」と、二郎ちゃんじろうは、いいはりました。

「みんなほかの人ひとは、きれいにしていいらつしやるのに、おまえだけ、そんなふうをしてい

ていいのですか。」と、お母^{かあ}さんは、じつと、二郎^{じろう}ちゃんをごろんになりました。

「だって、僕^{ぼく}、わるいお点^{てん}だと、新^{あた}しい洋服^{ようふく}など着^きていって、恥^はずかしいんだもの。」と、二郎^{じろう}ちゃんは、きまり悪^{わる}そうに、いいました。

「ああ、それでそういうのですか。考^{かん}えてごらんさい、平常^{ふだん}遊^{あそ}んでばかりいて、いい成^せ績^{せい}のとれるはずがないではありませんか。」

「僕^{ぼく}、新^{しん}学^{がく}年^{ねん}から、勉^{べん}強^{きやう}するのだ。」

「どうですか。」

「ほんとうだよ、お母^{かあ}さん。」

「いままでのように、遊^{あそ}んではいけませんよ。」

「お母^{かあ}さん、これから勉^{べん}強^{きやう}するから、丙^{へい}があつてもしからない。」

「丙^{へい}ですか、そんなわるい点^{てん}があると思う^{おも}のですか。」と、お母^{かあ}さんは目^めをまるくしました。

お母^{かあ}さんは、これから勉^{べん}強^{きやう}するなら、しからないとお約^{やく}束^{そく}をして、新^{あた}しい洋服^{ようふく}を着^きせて、二郎^{じろう}ちゃんをお出^だしになりました。

二郎^{じろう}ちゃんは、自分^{じぶん}でも、あまりいい成^{せい}績^{せい}とは思^{おも}われなかったので、いくつ甲^{こう}がある

かなあと考えていました。先生が、通信箋をお渡しなされると、胸をどきどきさせながら開いてみました。体操が甲になつてゐるだけで、あとはずっと乙の行列でありました。二郎ちゃんは、おしどりが行儀よく並んでゐるので、おかしくなりました。しかし、お家へ帰ると、さすがに、元氣よくこれをお母さんに見せる勇氣がなかったのです。お縁側には、ねこがひなたぼっこをしていました。二郎ちゃんは、ねこが大好きでしたから、すぐそのそばへすわりました。ねこは二郎ちゃんを見ると、ごろりと横になつて、あくびをしながら四つ足をのばしました。

「僕は、体操がうまいんだぜ、ほら甲だろう……。」「と、通信箋をねこの鼻さきにひろげて見せたのです。

こちらのへやで、お仕事をなさつていたお母さんは、二郎ちゃんの声を聞くと、
「二郎ちゃん、帰つたのですか。なぜここへきて、ごあいさつをしないのです。」「と、おつしやいました。

「うん、いまいくよ。」

二郎ちゃんは、ねこの顔へ、自分の顔を押しつけてから立ち上がりました。

二

いいお天気で、日曜日です。もう、学校は二、三日前から、はじまっています。ご用があつても、二郎ちゃんは、外へ遊びに出たぎり帰ってきません。新学年から、勉強をするといいいながら、しかたのない子だとお母さんは探しに外へ出られました。春風が吹いて、たこのうなりがきこえています。お母さんは、

「二郎は、ここにいませんか。」と、遊んでいる子供にお聞きになりました。

「二郎ちゃんは、さつき勇ちゃんと原っぱの方へいったよ。」と、子供は、答えました。

どこかの庭に咲いている花の香が、往来まで流れてきます。自転車は、日の光の輪

をかがやかして走つていきました。原っぱには、子供がたくさん遊んでいました。お母さ

んは、どの子供を見ても、自分の子に見えたのです。ズボンを短くはいて、足がすらりと

して、帽子を横にかぶっている十歳前後の子供たちばかりであります。また、お母さんは、

「二郎はいませんか。」と、お聞きになりました。

「いませんよ。勇ちゃんのお家へいったのでない。」と、一人の子供が、おしえてくれま

した。

「ありがとうございます。」

お母^{かあ}さんは、帰^{かえ}りかけながら、お隣^{となり}の勇^{ゆう}ちゃんの家^{いえ}を思^{おも}い出^だしました。いま勇^{ゆう}ちゃんのお母^{かあ}さんは、お産^{さん}をして、まだ床^{とこ}についていられました。先日^{せんじつ}、おみまいにいくと、勇^{ゆう}ちゃんの妹^{いもうと}の、小^{ちい}さなみい子^こさんが、

「二郎^{じろう}ちゃんのおばさん、ここ、ここ。」といって、無理^{むり}に二郎^{じろう}ちゃんのお母^{かあ}さんをたすの前^{まえ}へつれてきました。

「うん、うん。」と、ひきだしを開^あけるというのであります。すると、寝^ねている勇^{ゆう}ちゃんのお母^{かあ}さんは、

「みい子^このお好^すきな赤^{あか}いおべべが、はいつているというのですよ。」と、おつしやいました。

「まあ、みい子^こちゃんのお赤^{あか}いおべべが。」

「赤^{あか}ちゃんのおべべよりも、きれいだといっていたみたいです。奥^{おく}さん、どうかあけて見てやってください。」と、勇^{ゆう}ちゃんのお母^{かあ}さんが、いわれました。

二郎^{じろう}ちゃんのお母^{かあ}さんは、たんすを開^あけて、みい子^こちゃんの、きれいなおべべをごろんになりました。

「きれいな、いいおべべですこと。」と、二郎ちゃんのお母さんが、おほめになりました。「みい子おべべ。」と、みい子ちゃんは、しきりにいつて、こんどは、これをきせてくれというのです。しかし、それは単衣物でありました。

二郎ちゃんのお母さんは、そのときの無邪気なみい子ちゃんのようなすを思い出して、ひとりほほえみながら、歩いていられました。

三

二郎ちゃんは、勇ちゃんの家にもいませんでした。二郎ちゃんと勇ちゃんは、小さなみい子ちゃんをつれて、川へ釣りに出かけたのです。それは、勇ちゃんと二郎ちゃんの釣りにいく約束がしてあったところ、

「勇ちゃん、すこしみい子を見てやつておくれ。」と、寝ているお母さんにいわれたので、妹もいつしよにつれていくことにしたのです。途中、勇ちゃんは、小さな妹の手をひいてやりました。

生まれてはじめて、広い、青々とした畑を見たので、みい子ちゃんは、なにを見ても

珍めずしかったのです。花はなびらが、風かぜに吹ふかれて飛とんできても、

「ちようちよう、ちようちよう。」といって、よろこびました。川かわへくると、ほかの子供こどもたちもおおぜいいました。

「二郎じろうちゃん、あすこがいいよ。」と、勇ゆうちゃんが、川かわの曲まがり角かどをさしました。そこには、おじいさんが、釣つりをしていました。二郎じろうちゃんと、勇ゆうちゃんは、おじいさんのじやまにならぬように、すこしはなれて糸いとを下さげたのです。

「あ、二郎じろうちゃん、引ひいたのではない。」と、勇ゆうちゃんが、いいました。

「ごみが、ひつかかったのだよ。」と、二郎じろうちゃんは糸いとを上あげて、ごみを取とりました。

「兄にいちゃん、もう帰かえるの。」と、みい子こちゃんが、泣なき声こえをだしました。

「ばか、いまきたばかりじゃないか。」

みい子こちゃんは、しかたなく一人ひとりで遊あそんでいました。

「もうお家うちへ帰かえるの。」と、またいいだしました。二郎じろうちゃんが、ふり向むいて、

「みい子こちゃん、一匹びきつ釣つれたら帰かえろうね。」といいました。

「みい子このばか。」と、勇ゆうちゃんは、しかりました。すると、みい子こちゃんは、わあわあ
と泣なき出だしたのです。

「あちらへ、つれていつて。」と、おじいさんが、いいました。勇ちゃんも、二郎ちゃんも、おじいさんの顔を見ました。そして、みい子ちゃんをつれて、ほかのところへ移りました。

「二郎ちゃん、僕、先へ帰るから。」と、勇ちゃんがいいました。

「僕も、いつしよに帰るよ。」と、二郎ちゃんも、帰る支度をしました。

三人は、また田圃道を歩いて、往來へ出ました。

「兄ちゃん、おんぶして。」と、急にみい子ちゃんは、道の上へしやがんでしまいました。

「困ったなあ。」と、勇ちゃんは、小さな妹を負いました。途中で、二郎ちゃんが、代

わつてやりました。しかし、二人とも疲れてしまいました。みんなは、おなががすいたの

です。このとき、二郎ちゃんが、ポケットに手を入れると、昨日お母さんが、明日の朝忘

れるといけないういって、お渡しになった月謝が入っていました。

「勇ちゃん待つておいで。」と、二郎ちゃんは、どこかへ向かつて、走り出しました。そ

して、道端のお菓子屋から、キヤラメルを買つてきて、みい子ちゃんにも、勇ちゃんに

も分けてやりました。三人は、やっと元気がついて、歩くことができたのでした。

その晩のことです。二郎ちゃんは、月謝のお金を使つてしまつて、どういつておわび

をしていいかと苦しんでいました。ちょうどそのとき、
「ごめんください。」と、玄関で声がしました。お隣の勇ちゃんのお父さんがいらしたのです。

「お礼に上がりました。きょうは二郎ちゃんに、うちの子供がたいへんお世話になりました。」と、おじさんは、お礼をいって、月謝の金を返しにきてくださったのです。二郎ちゃんのお母さんも、お父さんも、はじめてそのことを知って、すぐにいいお返事もできず、ただおたがいさまどうしですからと、笑っていられました。しかし、おじさんがお帰りなされると、

「おまえは、いいことをしました。そんなときは、自分の力でできることなら、なんでもしなくてはなりません。」と、お父さんは、二郎ちゃんをおほめになりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「小《ちい》さな妹《いもうと》をつれて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな妹をつれて

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>